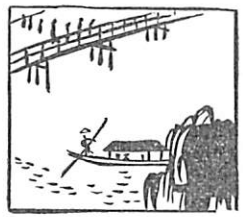
「なあお爺さん、世の中に又とこんな嬉しい事はないが、貴君何時までも此家に居なさるかェ、お花の傍に」
「居るとも〳〵、私は死ぬまで此家は離れぬ」
「そうでも京の家は何うしなさるェ」
「京の家なんぞは何うでも宜い、此家で孫の守をして一生を送るつもりや。べらぼうめ」
「お爺いさん、急に江戸ッ子になりなさつたな」
「あゝ有難い〳〵、これも南無大慈大悲の觀音さんのお利益や」
「なあお爺いさん、昨日は木賃宿で、ゴツ〳〵した蒲團の中で何やら痒ふて〳〵、寢られなんだが、今夜は絹布の夜着蒲團で宜い氣持やが、昨夜までは何であないに寢苦しかつたのぢやろうか知らん」
「お婆さん、其れも矢つ張り觀音さん（虱）のおかげぢやわいな」

（終）



大津繪

聞くとぬむとなる物

聞けばねむとうなる、其ものとへば。春の日永に雨の音。秋の夜の、虫の聲。聲を自慢の、火の廻り。時刻にして寢る、夜そば賣り。かすかに茶釜の煮える音。猫の欠伸と、糸つむき。へたな講釋、金魚賣り、子守り唄。すま琴の稽古に、ぐず〳〵ばなし。となりお婆さんが、念佛まぜりの御法談。